



# 月報

No. 433  
2016年  
6月

日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会  
茅ヶ崎市香川1丁目34-35

<http://kagawachurch.jimdo.com/>

## 説教 『教会の誕生と伝道の開始』

(聖霊降臨日 礼拝)

小河信一 牧師

使徒言行録 2章1節～11節

<sup>1</sup> の日が来て、一同が一つになって集まっていると、<sup>2</sup> 突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。<sup>3</sup> そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。<sup>4</sup> すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

<sup>5</sup> さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、<sup>6</sup> この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。<sup>7</sup> 人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。<sup>8</sup> どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。<sup>9</sup> わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、<sup>10</sup> フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方な

どに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、<sup>11</sup> ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

本日の新約に対応する個所として、創世記11:1-9「バベルの塔」を取り上げました。それらの旧新約聖書は、合わせ鏡のように、両方が照らし合わされると、神の裁きと救いの出来事全体が描き出されます。

使徒言行録2章では、神の御力、すなわち、聖霊の働きによって、全世界から人々が寄せ集められ、そこに、礼拝共同体が現れたということが書かれています。それに属する「信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った」（使徒2:44-45）とされています。エルサレムの二階座敷（ルカ22:12）に集っていた少数の主の弟子たちが召し集められ、神の定められた時と所において、教会が建てられたのです。ここに、御力によって神の喜ばれる礼拝共同体が造り出されました。

そのような初代教会の誕生を踏まえつつ、創世記11:1-9を通し、バベルにおける「礼拝共同体造り」を振り返ってみましょう。

創世記11:1-4——

<sup>1</sup> 世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。<sup>2</sup> 東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。

<sup>3</sup> 彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。<sup>4</sup> 彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

ここで、「塔」（原語：ミグダル）というのは一体、何なのでしょう？

これは一説には、古代メソポタミア文明の遺跡に見られるジグラットであると考えられています。実際、ジグラットは、日干しれんがを階段状に積み上げたもので、その頂上には神殿が築かれることもありました。

創世記8章では、洪水が止み、箱舟から外へ出て来たノアは、第一に「主のために祭壇を築いた」（8:20）と記されています。創世記8章と11章とは、祭壇または塔を中心に共同体の結束が強められ、礼拝をささげることが人々の生活の基盤となるという点で符合しています。

「礼拝共同体造り」の面で、仮にそれにふさわしい条件を挙げるとすれば、シニアルの地の平野に居住した人々には好条件がそろっていました。

①「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話している」（11:1,6）というように、言語的に意思の疎通がしやすかった。

②「石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた」（11:3）というように、飛躍的な技術革新が起こっていた。

③「彼らは……と話し合った」（11:3）、「さあ（私たちは）、（私たちのために）天まで……」（11:4）、「全地に散らされることのないように……」（11:4）というように、人々には団結力があつた。

④「（さあ私たちは）有名になろう」（11:4）というように、自分たちの名（名誉）を上げようとするを持っていた。

⑤（好条件の極め付けですが）高い塔を建てて、犠牲を献げる祭司に導かれ、主を拝みたいという信仰心があつた。

一言語による意志疎通、技術革新、団結力、有名になりたいという志など……これは、遠い昔のシナルの地での話ではなく、現代の日本にぴったり当てはまるように思われます。ただし、日本においては、アイヌ語や琉球語もあり、言語的な違いがあるというのが現実です。

果たして、①～⑤のような好条件のもと、当時の人々の「礼拝共同体造り」はどうなったのでしょうか？

創世記11:5-7——

<sup>5</sup> 主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、<sup>6</sup> 言われた。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。<sup>7</sup> 我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

<sup>8</sup> 主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。

彼らはこの町の建設をやめた、すなわち、礼拝共同体造りは中止されました。下からの人間集団の企ては挫折しました。

繰り返されている「散らす」（創世記11:4,8,9）は、民に対する主なる神の否であり、裁きでありました。ただし、人々が全地に散らされるということが、単に災いであったのか、あるいは、神の裁きの内にもっと深い意味があったのか、については、合わせ鏡である使徒言行録2章を読んでから考え直しましょう。

バベルの塔の出来事において、人々の行いや言葉は極めて簡潔にしか描かれていません。従って、多分に推察を含んでいますが、神から「散らされる」という裁きを受けた人々の内面の問題に関し、ここできちんと彼らの悪しき思いを捉えておくことにしましょう。

創世記の始め、人間の原点を顧みるならば、「天まで届く塔」（創世記11:4）という一句から、「神のようになる」（創世記3:5）という言葉が響いてきます。そこで暴かれているのは、神と人との間の絶対的な隔たりを人間の側から乗り越えようとする罪です。神への恐れ（申命記10:12）が欠け、自己中心になっていたと思われれます。人間同士の競争や社会の伸展の中で、隣人へのみ、憎しみ、みなどが芽ばえ出てくることは、古今東西、変わりがないことでしょう。

人々の大義は、塔と町を建てて、神を拝むということだったのかも知れませんが、人々に対し、主なる神はそのように求め、導いておられたのでしょうか。礼拝において大事なことは、私たちが「行く」「ささげる」ではなく、神が私たちが「招いている」という〈神の真実〉〈神の命令〉です。

バベルの塔の出来事において、神の本質を証示するかのようにより、「主は降って来て」（創世記11:5）及び「我々（神と御使いたちとの呼称：尊厳の複数形）は降って行って」（11:7）と、神の降臨が二度も明言されています。神が礼拝に來臨され主導されることに對抗して（先んじて）、「私たちが上って行く」ならば、すれ違いが生じることでしょう。「私たちは主の家に行こう」（詩編122:1 他に132:7）と歌っている詩人は、「来なさい」との神の御声を聞き届けられる「清い心をもつ人」（詩編24:4）だったのではないのでしょうか。

ユダヤ民族は、現実にバベルの塔のと苦難を背負い、バビロン捕囚という大惨事により、全世界に散らされて行きました。彼らは、ディアスポラの（離散的）な生き方を特徴とする民となったのです。つまり、主なる神がバベルの塔の逸話を、それが真実なものとして、神殿を中心とする礼拝共同体であったユダヤ民族において具現されたと見ることができます。それは、バベルの塔による預言の成就とも言えますが、神はまた、災禍に出遭った人々を見捨てることなく、苦難から救い出すお方であります。そのような仕方で、驚くべき恵みをあらわされる神です。

使徒言行録2:1——

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると

奇しくも、教会誕生が告知される物語の冒頭に、「一同が一つになって」と描き出されています。あたかも、人々が全地へ、遠方へ散り散りにされたということが、完全に乗り越えられてしまったかのような書き方です。

これは、過越祭から50日が満ちて、とうとう五旬祭が来た、という神礼拝、三大祭に関わることで、時を満たされる神、礼拝・祝祭をつかさどられる神が、会衆を一つとなるよう召し出した、と言えます。エルサレムへ、小高い山へ、人々が上って来るように、特別の礼拝に集うように、神が招かれたのです。

実際その時、五旬祭に参加した会衆の中には、メソポタミアやエジプトから過越祭の巡礼の旅をシエルサレムへやって来て、故国へ帰ることなく、そのまま50日間待ち続けていた人々もいたかも知れません。そうだとすれば、彼らの心には、故国で留守番をしている家族の安否を思い、早く帰りたいという気持ちがよぎったことでしょう。

そのような不安に駆られながらも、その年の過越祭の後、主イエス・キリストの十字架と復活の出来事の後、一体何が起こるのか、遠国から来た人々も、弟子たちや女性の信者と共に待望していました。神とキリストの為される大きな業に臨む姿勢として、「一同が一つになって」というのはまことにふさわしいものでした。祭りから祭りへ、主日から主日へ、地上の礼拝から天国の礼拝へ、大いなる祝祭を待ち望む初代教会の人々の信仰は、私たちが受け継ぐべきものです。

使徒言行録2:2――

突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。

突如、人々は上から下に吹いて来た激しい風（参照：讚美歌333番3節「あまつ風を おくりたまえ」）、すなわち、聖霊の力に満たされました。

バベルの塔建設の際には、「主は降って来て」、人間の言葉を混乱させられ、民を全地に散らされました。そして五旬祭の時、まさに「主は降って来て」という出来事が驚くべきかたちで成し遂げられました。父なる神と御子イエス・キリストは、全地からユダヤ人はじめ異邦人を含めて大勢の人々を呼び集められました。そして、神は、人々の言葉に、バラバラだった言語に介入されたのです。

使徒言行録2:6――

この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。

人々は過越祭の前後に、主イエス・キリストの十字架と復活が語り伝えられるのを聞き、今また、聖霊の働きによる御言葉に耳を傾けました（使徒2:6,8,11）。バベルの塔を建てようとした、ある意味では立派な志を持っていた人々に欠けていたものこそ、神の息吹である霊を受け止め、神の御心を御言葉を通して知ろうとする謙虚さではなかったでしょうか。

「聞いて、あっけにとられてしまった」という事は、使徒言行録2:2「激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ（あっけにとられてしまった）」から始まって、「めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか（あっけにとられてしまった）」（使徒2:8）、「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは（あっけにとられてしまった）」（使徒2:11）に至るまで、聖霊降臨は、聞くこと〈傾聴〉の驚きに包まれています。すなわち、神の御言葉を思いがけない形で聞いている信仰者の姿が浮き彫りにされています。五旬祭に集った人々は、驚きと讚美と感謝をもって、耳を傾けたのです。

初代教会の最初の礼拝とも言える出来事の中で、会衆の上に「炎のような舌」がとどまって（使徒2:3：原文では2:11にも「舌」〔=言葉〕が出ています）、これから彼らが大胆に福音を語るということ

が指し示されました。そして、福音を宣べ伝えることの源泉として、聖霊の働きの内に、「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まる」（ローマ10:17）ということが現されました。

使徒言行録2:11 人々の言葉——

「ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

初代教会の会衆が聞き届けた福音は、次の使徒言行録2:14-36、ペトロの説教によって詳しく述べられていますが、この個所では一言、「神の偉大な業」によって明らかにされています。「神の偉大な業」、メガトン級をも越える神の業、それはすなわち、主イエス・キリストは十字架につけられ、私たちのすべての罪をぬぐい去ってくださり、何のも無い私たちに永遠の命を与えてくださったという神の業であり、それを神からの語りかけとして聞いたということです。

過越祭から50日待たされる中で、エルサレムの丘には、全くバラバラな集団、すなわち、言語も出身地も別々であり、付け加えれば、どれくらい主イエスと共に生活を送ったかという点（使徒1:21-22）で隔たりのある人々が集まって来ていました。しかし、彼らは何かの力によって、「一同が一つになって」（使徒2:1）いました。

人々の備えは何も無いのに、祭りの始めから「一同が一つになって」のは、正しく聖霊の働きによることでした。バベルの塔の出来事を踏まえるならば、神の怒りと裁きを乗り越えて現れ出た神の救いの出来事でした。あの日「主は降って来て」（創世記11:5）と、人々の記憶にとどめられていた神が、この日、聖霊を遣わして降って来られたのです。そして聖霊は、御子、イエス・キリストが天から地へ降って来られたことを、人々がに宣べ伝えるよう助け導いておられます。

神の裁きによって、「一つの民で、皆一つの言葉を話している」人々（創世記11:6）が全地に散らされるという悲惨と苦難をも、神は今や恵みへと変えてくださいました。それぞれの故郷の言葉で神の偉大な業を聞いた人々が、神によって、故郷へ、あるいは全地へ遣われることによって、「すべての民がキリストの弟子となる」（マタイ28:19）ように伝道するという道が切り開かれました。派遣された人々には、聖霊の注ぎによって伝道困難な悪条件に打ち勝つことが出来るという希望が与えられました。

初めに「一同が一つになって」があるということ、つまり、さまざまな賜物を持つ人々の教会が、主の平和のうちに一致させられること、それはまさに茅ヶ崎香川教会の基礎であり、終わりの時を待つ私たちの希望であります。

茅ヶ崎香川教会月報  
No. 433

2016年6月26日発行  
編集発行：日本キリスト教団  
茅ヶ崎香川教会  
発行責任者：小河信一  
編集責任者：鈴木隆二